

アルケイアー記録・情報・歴史―

第一九号 二〇二四年十一月 六九―八七頁

南山アーカイブズ

南山アーカイブズの教育利用

～いりなか教育コンテンツの実践活動をふりかえって～

中尾陽子

南山大学経営学部准教授

Educational Use of the Nanzan Archives Reflections on the Practical Activities of Irinaka Educational Contents

Department of Business Administration, Faculty of Business Administration,
Nanzan University

NAKAO Yoko

Archeia: Documents, Information and History
No.19 November, 2024 pp.69-87
Nanzan Archives

- 一. 『いりなか教育コンテンツ』とは
- 二. 南山学園の歴史的建造物に関する教育コンテンツの作成過程
 - 二―一. いりなか教育コンテンツ第一弾（おみせたんけん！）への取り組み
 - 二―二. いりなか教育コンテンツ第二弾（歴史的建造物編）への取り組み
- 三. 南山アーカイブズの利用過程から生まれた体験と気づき・学び
 - ―南山アーカイブズに関わるひと・もの・こととのつながりから―
 - 三―一. 駆け込み寺としての存在に気づく
 - 三―二. ひと・もの・ことをつなぐパイプとしての存在に気づき、学ぶ
 - 三―三. ライネルス館への導き
 - 三―四. 史資料へのアクセスと利用のためのサポート
- 四. 南山アーカイブズの利用に関する今後の可能性と課題について

南山アーカイブズの教育利用

～いりなか教育コンテンツの実践活動をふりかえって～

中尾 陽子

今回、南山アーカイブズの教育利用について、地域と学校の視点から検討する機会をいただいた。そのため、本稿では、筆者がゼミの有志メンバーと共に課外活動として取り組んだ、『いりなか教育コンテンツ』に関する実践活動についてふりかえることとした。この活動を通じて、筆者らは様々な学びを得てきたと感じている。そのため、まずはこの活動の概要について記述し、その中でも特に南山アーカイブズの利用過程で生まれた様々な体験と、それらを通して学生たちや筆者の中で生まれた気づきと学びに注目しながら、南山アーカイブズの教育利用の可能性について検討していきたい。

一．『いりなか教育コンテンツ』とは

『いりなか教育コンテンツ』とは、いりなか商店街発展会のホームページ（以下、HPと略記）上に二〇二一年七月より公開された『いりなか探検！発見！』ページの内容を指している（いりなか商店街発展会、二〇二二）。いりなか商店街発展会は、主に地下鉄鶴舞線のいりなか駅付近から八事駅までの間にある店舗等が加盟する組織であり、「私たちにとって発展とは、この街に係する人の絆が結ばれ、深まり、広がること。『いこいで暮らしたい』 そんな思いを創っていきます。」を理念とし、二〇〇四年よ

り活動されている。

いりなか商店街発展会における『いりなか教育コンテンツ』の企画は、二〇二〇年にコロナウイルス感染症が世界的に蔓延し、日本国内でも様々な行動制限が生じたことに端を発している。コロナ禍に陥る前、いりなか商店街発展会に加盟するいくつかの店舗や医院は、地域の小・中学校が行う職業体験学習や地域学習に協力していた。学校により実施方法は異なっていたようだが、概要としては、生徒数名によるグループで協力店舗や医院を訪問し、スタッフの話を聞いたり、仕事の一部を体験していたそうだが、

しかしコロナ禍に入り、教育場面にも様々な制約が生じることとなった。学校内外での活動が厳しく制限される事態となり、三密回避が叫ばれる中、個人の経営する店舗や医院を訪れるという体験学習の実施は、非常に難しい状況に陥ったのである。そのため、学校によつては、教員自ら店舗へ出向き、仕事の様子などを撮影して新たな教材を創り、体験学習の代わりとなる学習場面を創出されたとも伺っている。このような変化への対応は、ただでさえ日々多くの業務を抱える教育現場にとって、更に重い負担をもたらすものであったことだろう。

このような状況を知ったいりなか商店街発展会会長は、実際に店舗を訪れることができなくても、デジタルコンテンツを活用すれば、いりなかの街とそこで行われている数々の営みについて学ぶ可能性が広がるのではないかと考えられた。そこから発案されていったのが、このいりなか教育コンテンツの企画である。更に、今時の大学生はこのような企画に関心を持つのではないかと考えられた会長が、筆者に声をかけてくださり、筆者のゼミの中でこの内容に関心を持った五名の学生と共に、実際の活動を始めることとなった。とはいえ、筆者らはデジタルコンテンツの作成経験など全く持っておらず、この状況の中で自分たちにできることがあるならばお手伝いしたいという思いだけを頼りに、完全なる手探りで活動を始めたような状況であった。

二 南山学園の歴史的建造物に関する教育コンテンツの作成過程

二・一 いりなか教育コンテンツ第一弾（おみせたんけん！）への取り組み

いりなか教育コンテンツの作成は、発案の経緯を踏まえ、まずはいりなか商店街発展会加盟者の中から、小学生にとって身近で関心を向けやすいような店舗等へ協力を依頼することとした。協力者の方からは、日々の仕事内容だけでなく、その奥にある仕事に対する思いなどを聞き取ること、また、写真や動画を用いて子ども達にも見やすくなりやすいコンテンツにすることを目指した。このコンテンツ第一弾の作成に際しては、商店だけではなく医院や郵便局の方にもご協力いただくことができたため、いりなかの街を支える多様な営みについて見渡すことのできるものになったと感じている。

この企画に参加を希望した五名の学生たちは、二〇二二年五月中旬から二ヶ月ほどかけて協力者へのインタビューを行い、八つのコンテンツを作成した。それらを用い、いりなか商店街発展会のHP担当者が、HP上『いりなか探検！発見！ お店たんけん！』にて閲覧できる状態に整えてくださった（いりなか商店街発展会、二〇二二）。筆者らのような全くの素人が作成した素材は、おそらくHP上で閲覧可能な状態にするために、かなり手を入れていただく必要があったものと推察する。ホームページご担当者の温かなサポートによって、学生たちの取り組みを形にいただいたことには、感謝しかない思いであった。

二二 二 二 二 いりなか教育コンテンツ第二弾（歴史的建造物編）への取り組み

二〇二二年八月に教育コンテンツ第一弾が公開されて間もなく、いりなか商店街発展会HP担当者より、できるだけ早く地域にある歴史的建造物を対象としたコンテンツも作成してほしいとの声をいただいた。現状のコンテンツは商店を対象としたものが大半であることから、営利的な印象が拭えないであろうことを危惧しておられたのである。そして、この企画が『教育』コンテンツになっていくために、次はぜひ歴史的建造物を対象にしてほしいと強く要望された。その思いは十分に理解できるところであったため、筆者らは次の対象について早速検討を始めた。

いりなか商店街発展会会長の当初の構想の中には、いりなか・八事界隈にある複数の歴史的建造物の名前が挙げられていた。その中で、学生たちが最も身近な印象をもった歴史的建造物は、南山学園の施設であるライネルス館（登録有形文化財・名古屋市都市景観重要建築物）・南山講堂そしてピオ十一世館（共に、名古屋市都市景観重要建築物）であった。とはいえ、彼らにとって

身近な印象というのは、『南山』の響きからくるものであり、実際にある建造物に対してではないものと推察された。南山大学からさほど遠くない地にある建物でありながら、大学生にとってこれらが身近な存在とは言えないことについては、学生達の通学路とも関係があると思われる。名古屋市営地下鉄の名城線が環状運転を始める前、南山大学へ通学するための最寄り駅は、地下鉄鶴舞線のいりなか駅であった。そのため、この時代の南山大学生にとって、いりなかの街は馴染みある場であったことも間違いない。しかし、二〇〇四年の名古屋大学・新瑞橋駅間の開通により大学の最寄り駅が地下鉄名城線の八事日赤駅となってから、いりなか駅を利用する学生は極端に減り、大半の学生にとっていりなかは「よく知らない街」になってしまったのが現状である。教育コンテンツ第一弾に続き、歴史的建造物のコンテンツ作成にも参加を表明してくれた四名の学生達にとっても、この時点で南山学園の歴史的建造物は、「どこにあるかすら知らない建物達」であったため、まずはとにかく見に行ってみることを勧めたような状況だった。

その後、いりなか教育コンテンツの第二弾が『いりなか探検！発見！ちいきたんけん！』（いりなか商店街発展会、二〇二二）としてHP上へ公開されるまでの取り組みは、おおよそ表一に示すようなものであった。結果として、ライネルス館・南山講堂・ジオ十一世館三つの建造物のコンテンツを作成するにあたり、南山アーカイブズと南山学園経営本部総合企画室職員の方々及び南山大学国際教養学部・永井英治教授には、活動全般に対し多大なるご協力をいただいた。また、その他にも、いりなか商店街発展会関係者を始めとする地域の方々や南山学園内の教員及び事務職員の方々の協力とご示唆をいただきながら、この活動を進めてきた。筆者らだけでは決して気づくことすらできなかったこと、そして成しえなかったことが大半であったと、改めてこの活動をふりかえった今実感している。お忙しい中、快くご協力くださったみなさまには、どれだけ感謝の思いをお伝えしても足りない気持ちである。

表一．
いりなか教育コンテンツ（歴史的建造物編）への取り組みと南山アーカイブズ教育利用の概要

二〇二一年 八月上旬	いりなか商店街発展会HPにいりなか教育コンテンツ「いりなか探検！おみせたんけん！」の第一弾が公開される。その際、次はいりなかの歴史的建造物を紹介したいという強い要望をお聞きする。ゼミ生有志による教育コンテンツ作成メンバーで検討したところ、南山学園の歴史的建造物へ関心が集まる。
二〇二一年 九月上旬	南山アーカイブズへ、南山学園の歴史的建造物に関するインタビュ어의可能性について問い合わせ。
二〇二一年 九月下旬	南山学園経営本部総合企画室へ問い合わせ。
二〇二一年 九月下旬	南山学園経営本部総合企画室の学園広報担当職員より返信をいただき、施設の見学について打ち合わせ。
二〇二一年 十月上旬	南山学園経営本部総合企画室・学園広報担当職員の協力のもと、ピオ十一世館および南山講堂を見学（参加者…いりなか商店街発展会事務局長および筆者）
二〇二一年 十月中旬	ライネルス館見学。この際、南山アーカイブズ職員より、南山大学附属小学校の3年生が、毎年南山アーカイブズを訪れ、学びの時間を過ごしているという情報を得る。
二〇二一年 十月下旬	南山大学附属小学校を訪問。南山アーカイブズにおける学習のねらいや学習内容について説明を受けると共に、他学年の生徒達が南山アーカイブズや他の二施設を訪れる機会についても教えていただく。また、小学生が関心を持つようなこと・もの・仕掛けなどについてのアイデアを聞かせていただく。その中で、南山学園に残る戦争の爪痕に関する話もお聞きする。
二〇二一年 十一月上旬	今後の教育コンテンツ対象となる八事山興正寺を見学（参加者…学生一名および筆者）。その際に、興正寺の七不思議の話がうかがう。
	教育コンテンツ作成メンバーのミーティングにて、『南山学園の七不思議』という観点で建造物の内外を紹介することによって、こども達に関心を持ってもらえるのではないかと案が出る。このような観点からインタビュ어를する可能性について、南山学園総合企画室へ問い合わせ。
	南山学園総合企画室より、『南山学園の七不思議』の案の一つとして挙げた『戦争の爪痕』というキーワードに対して、南山大学国際教養学部・永井英治教授をご紹介いただく。

二〇二一年 十一月上旬	永井英治教授へ問い合わせ。
二〇二一年 十一月中旬	永井教授より返信をいただき、ライネルス館をご紹介いただくと共に、現地をご案内いただく運びとなる。
二〇二一年 十二月下旬	ライネルス館見学（参加者…学生二名および筆者）。
二〇二一年 十二月下旬	永井教授に解説していただきながら、南山アーカイブズの一般展示スペースの展示物を見学。また、一般には未公開エリアである旧教室・防空壕跡（館内・館外）・屋上も見学させていただく。
二〇二一年 十二月下旬	南山学園総合企画室の協力を得て、ゼミの三年生メンバー全員でビオ十一世館・南山講堂を見学させていただく。見学の際は『こどもの視点を持ちながら見学し、気になったところを写真撮影し、感想を思い浮かぶままに書く。その内容を記録する。』を課題とした。
二〇二一年 十二月下旬	見学の結果を踏まえ、教育コンテンツ作成メンバーによる紹介内容の検討。資料の調査と収集。
二〇二一年 十二月下旬	南山学園総合企画室にご協力いただき、追加の写真および動画撮影。
二〇二一年 十二月下旬	資料調査・収集の結果、自分たちでは手に入られなかった写真や不明な点が浮上。南山アーカイブズへ資料提供依頼および不明点に関する問い合わせ。
二〇二一年 一月上旬	次年度からゼミ生となる二年生メンバー有志と共に南山学園の歴史的建造物三館を見学。ここまでの活動を説明し、新しいアイディアも得ながら、共にコンテンツを作成。
二〇二一年 一月中旬	南山アーカイブズへ、不足資料について問い合わせ。
二〇二一年 一月中旬	南山アーカイブズより資料提供。これらの史資料使用に必要な書類作成についてもサポートしていただく。
二〇二一年 一月中旬	コンテンツ案完成。ご協力いただいた関係者へ内容の確認を依頼し、コメントをいただく。それらを踏まえて加筆修正。
二〇二一年 一月中旬	いりなか商店街発展会H P作成担当者へ作成したコンテンツを提出。
二〇二一年 一月中旬	いりなか商店街発展会H P作成担当者として協力し、コンテンツの加筆修正。
二〇二一年 九月中旬	いりなか教育コンテンツ『いりなか探検！発見！ちいきたんけん！』第一弾としてH P上に公開

三三 南山アーカイブズの利用過程から生まれた体験と気づき・学び

ー南山アーカイブズに関わるひと・もの・こととのつながりからー

ここからは、実際に南山アーカイブズおよび関係者の方々にご協力いただきながら、教育コンテンツ『ちいきたんけん!』編に取り組む過程で生まれた体験と、それらを通して学生たちや筆者の中で生まれた気づきと学びに注目しながら、南山アーカイブズの教育利用について検討していきたい。

この取り組みを改めてふりかえってみると、筆者らは、南山アーカイブズを通してそこに関わるひと・もの・こととつながる機会をいただき、そこから様々な体験をし、気づきや学びが生まれていたことを実感する。それらは、大きく以下の四つの側面から捉えることができるものであったと考えている。

三一・ 駆け込み寺としての存在に気づく

歴史的建造物に関するコンテンツについて、いりなか商店街発展会会長の構想をお聴きした時点での筆者らは、「何をどこから始めればいいのか見当もつかない」というのが正直な感覚であった。南山学園の歴史に関する文献資料も、探せばきつとあるに違いないと思うものの、それらへ行き当たるために何らかの手がかりが欲しいという気持ちで一杯だった。自分が長く過ごしてきた南山学園の歴史にこれほど無知であったことに恥ずかしさを感じながら、手がかりを探していたと言える。そんな時、今回の教育コンテンツの対象の一つと考えていたライネルス館に『南山アーカイブズ』があることを知り、ここに関わられている方であれば何かご存知なのではないだろうか、われをもつかむ思いで連絡をさせていただいた。その推測は的外れでなく、問い合わせメールに対してすぐさま南山アーカイブズ担当職員の方が対応してくださったことを、今でも強く記憶している。この時の返信は、「問い合わせの件については、南山学園経営本部総合企画室にて対応する」という旨の内容であったが、今後の活動でもこちらを頼り

にさせていただければ何らかの糸口が見つかるかもしれない、という安心感に包まれた。

取り組むべき課題は明確であっても、そこへどのようにアプローチしていけばよいのか途方に暮れているようなとき、駆け込み寺というのは心理的な面でとても大きく大きな支えとなる。学園の中にこれほど貴重な存在があることに気づけただけでも、いりなか教育コンテンツに取り組んだ意味があったと感じるくらい、大きな出会いであった。

三二二 ひと・もの・ことをつなぐパイプとしての存在に気づき、学ぶ

初回の問い合わせ以降も、南山アーカイブズ担当職員の方へは度々問い合わせをし、多方面からご協力いただくこととなった。また、併せて南山学園経営本部総合企画室の担当職員の方にも多大なるご協力をいただいた。お二人は、問い合わせの度に的確な情報および資料の提供をしてくださると共に、より適切な人物や部署へも繋げてくださった。そのおかげで、筆者らは路頭に迷うことなく、この活動を進めることができたと考えている。

資料という点では、南山大学国際教養学部・永井英治教授と南山アーカイブズ担当職員の方により、いくつもの有益な資料達へ繋いでいただいたことが印象に残っている。筆者らがまだ図書館やインターネット上で目ぼしい資料に出会えていなかった時期にいただいたこのサポートは、当コンテンツのイメージを広げる上で欠かせない働きかけであった。特に、南山大学五十年史写真集（南山大学50年史作成小委員会編、一九九九）の提供は、豊富に掲載されたその写真資料から、当時の様子を豊かにイメージすることに繋がった。また、『アルケイアー記録・情報・歴史』に掲載された論文のうち、参考となりそうな文献を示していただいたことは、後述する永井教授のお話について理解を深めるために不可欠な働きかけとなった。更に、比較的短く親しみやすい文章と豊富な写真で構成される『南山アーカイブズニュース』を紹介していただいたおかげで、文献調査が得意とは言えない学生達も積極的に活用し、南山に関する歴史や、現在も残されているもの達に込められた意味や思いを理解することにつながった。

南山アーカイブズ担当職員の方には、南山大学附属小学校三年生の生徒達が、毎年南山アーカイブズを見学し学びの時間を過ごしていること、また、その際の取り組みの様子について教えていただき、同校教諭へと繋いでいただいた。このことは、本活動

の大きな支えになったと考えている。南山大学附属小学校を訪問し、南山アーカイブズでの学習のねらいや学習内容について伺ったところ、学習時のワークシートの内容と具体的な学習の様子について教えていただいた。また、本企画について説明し、小学生が関心を持ちそうなことについてご意見を伺ったところ、これまでの経験に根ざしたわくわくするようなアイデアを次から次へとお話くださった。ここでいただいた数々の示唆は、この後、小学生の視点に立ちながらコンテンツを考えていく上で、筆者らの指針となっていた。

筆者自身は南山短期大学の卒業生でもあり、南山学園で職を得てからも四半世紀ほどが過ぎているため、これまでも南山に関する情報が身近なところに存在していたことは間違いないだろう。しかし、いざこのような状況になって必要な情報にアクセスしようとなると、自分の力では限界を感じることはかりであった。そのような中で南山アーカイブズがパイプとなり、筆者らを適切なひと・もの・ことへと繋げてくださった。今回の取り組みにおいて、南山アーカイブズとそこに関わる方々の存在は、とても心強いものであったと感じている。

三二二 ライネルス館への導き

三二二に記した南山大学附属小学校教諭からうかがったアイデアの中で、学生たちの心に残ったキーワードの一つは、「戦争の爪痕」であった。このことについて南山学園経営本部総合企画室の担当職員の方へ問い合わせたところ、南山大学国際教養学部・永井英治教授が詳しいであろうとご教示いただいた。そこで永井教授へご連絡させていただき、ご存じのことがあれば教えていただきたいとお願いしたところ、快く応じてくださった。その際、ライネルス館に今も残る防空壕跡などの見学をご提案いただき、早速、学生たちとライネルス館を訪れる運びとなった。

ライネルス館を訪れた日、まずは永井教授にご説明いただきながら、ライネルス館の中を見学させていただいた。教室として使われていたというお部屋で、当時のままと言われる教壇に立ってみると、黒板が外国教員の身長に合わせた高い位置に設置されていることを体感できた。これは、南山小学校創設当時の光景が浮かんでくるような、とても不思議でわくわくする体験だった。

展示されている数多くの写真からは、南山学園創設前から近年に至るまでの学校やいりなかの街の様子を知ることができた。学生達は、現在とは大きく異なる風景写真に驚きながら、これはどの辺りだろうか？と盛り上がっていた。

また、通常では入ることのできないエリアへもご案内いただき、見学する機会を得た。今も残されている防空壕跡は、暗くてもがよく見えないのだが、古びた床（もちろん、実際には十分な強度があるだろうが、見た目はなかなかのスリルを感じるありようであった。）の上に立ち、中を覗き込みながら、戦時中のこの地で一体どのようなことが起きていたのだろうか？と言葉を交わし合い、精一杯想像を膨らませようとした。

続いて屋外に出て、この防空壕からつながる地下通路を案内していただいた。一見、そこは舗装されていないただの小道で、その下に通路があるとはまるで想像できない場所であった。もし説明していただかなければ、決して気づくことのできないものがあり、不謹慎かもしれないが、筆者らのわくわく感は大いに高まった。また、地下通路がどこまで広がっているのか現状ではわかっていないという永井教授のお話を伺い、このわくわく感は更に高まっていった。

最後に、屋上へと通じる扉を開けていただき、最上階からの景色を見た時にも、大きく胸躍る感覚を味わった。ライネルス館の建物自体は3階建てであるため、周りの様子を遠くまで見渡せるという訳ではないのだが、いつもの目線では見えていなかったものをいくつも発見し、見慣れた景色に更なる奥行きと彩りが加わるような感覚を感じていた。しかし、永井教授より、戦時中はこの屋上に機銃が設置され、飛行機を撃ち落としたこともあるらしいという説明を受けると、防空壕の前に立った時と同じように再び気持ちが引き締まるのを感じた。この学び舎では、その始まりからずっと、一人ひとりの持つ尊厳を大切にしながら様々な営みが織りなされてきたはずである。しかし、時代の要請により、そのような思いとは全く違う役割を果たさざるを得なかったことを知り、関係者の苦しみはいかばかりだったかと、当時に思いを馳せた。



図1. 高い位置に設置された黒板

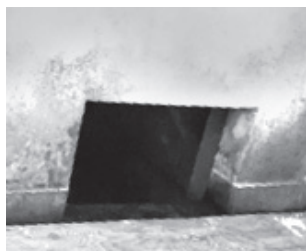


図2. 防空壕跡



図3. 防空壕からつながる地下通路上



図4. ライネルス館屋上

ここで伺ったお話しは、筆者らにとって知らなかったことや想像もしていなかったことばかりであり、ライネルス館という歴史的建築物がこれまでに体験してきたであろうことを十分に想像し切れない感覚も残った。しかしそのことはかえって、筆者らの中に「より深く知りたい」という気持ちが生まれるきっかけとなったように思う。大学へ戻り、いただいた論文や資料（永井、二〇一五；永井、二〇二一）を早速読ませていただき、先ほど伺ったお話がよりクリアにイメージされていく感覚を、みなでじっくりと味わった。

また、これらは自分たちが知らなかったことばかりであったため、今回の体験を通して知ったことを、「ぜひ他の人にも知ってほしい・知らせたい」という思いに繋がっていったと感じる。この「知ってほしい」「知らせたい」という気持ちは、この教育コンテンツ作成にとって欠かせないものであったこと間違いなく、筆者らをライネルス館へと導き、このような気持ちを生み出し、高めてくださったご縁の数々に改めて感謝している。

三・四 史資料へのアクセスと利用のためのサポート

南山学園の歴史的建造物三館のコンテンツを具体的に検討し始めると、学生たちからは、南山アーカイブズの所蔵する写真資料を使用させていただきたくなるようなアイデアが次々と挙がってきた。このことは、コンテンツ利用の中心的なターゲットである小学生に関心を持ってもらうために、まずは文字よりも写真などの映像が有効であろうと考えたことと関連している。とは言え、筆者らにとって南山学園に関する史資料の利用は今回が初めてであり、どのようにすれば欲しい資料にアクセスできるのか、また、見つかった場合もどのようにすればそれらを使用できるのか不明であった中、南山アーカイブズの職員の方に大きく以下の二つの側面から助けていただいた。

一つ目は、資料の検索に関することであった。担当職員の方からは、ライネルス館に展示されていた写真だけでなく、書籍に掲載されていた写真についても、書籍名と掲載ページを伝えるだけで、素早く該当写真を提供していただいた。また、更にありがたかったことは、筆者らの中にイメージは浮かんでいても、実際にそのような資料が存在しているのか曖昧な段階でのサポートで

あった。「これこれについて伝えるような写真が欲しいと考えているが、もし該当するような所蔵資料があれば教えていただきたい。」とお伝えするだけで、いくつかの候補を素早く提示していただけたことは、とても大きく大きな支えとなった。またこのような曖昧な問い合わせに対し、資料の探索が難しいと判断されたものについてはすぐさま難しい旨を伝えてくださるため、長く提供を待つ時間が生まれることはなく、筆者らも次の策を練ることができた。これらの資料は全て e-mail を通してデジタル画像で提供していただいたため、やりとりとしても迅速であり、教育コンテンツを作成する上でもすぐに利用できる状態となっていたことは大変ありがたかった。

二つ目は、史資料使用の手続きのサポートであった。史資料の使用に必要な手続きは、学内用と学外用で異なっていることを今回初めて知ったのだが、その書類作成に際してのサポートも万全で、手続きを迅速に進めることができた。また、筆者にとってホームページに掲載されるようなデジタルコンテンツ作成に関わるのは初めてのことであったため、自分が気づいていないところでの著作権侵害が生じることにしても心配していたが、気になる点は本当に些細なことでもすぐに相談にのってくださったため、安心して活動を進めることができた。

このような体験を通して、南山アーカイブズ職員の方は、日々の業務の中で膨大な史資料を把握した上で適切に保存・管理していらつしやること、また、それらを活用するための仕組みづくりと運用をなされている様子が伝わってきた。筆者らの今回の体験から、南山学園の史資料へアクセスしたいときには、まず南山アーカイブズへ問い合わせ、アドバイスを得てみることをお勧めしたい。

四．南山アーカイブズの利用に関する今後の可能性と課題について

ここまで、筆者らがゼミの課外活動として取り組んできたいりなか教育コンテンツの概要、そして、そのための南山アーカイブズ利用過程で生まれた体験とそれらを通して得られた気づきと学びについてふりかえり、検討してきた。筆者らにとっては初め

てのことはかりであり、驚きと喜びを感じながら気づきを記してきたが、関係者の方々にとっては特に目新しいことではなかったかもしれない。その点については、どうかご容赦いただきたく思う。また、この活動の過程をふりかえる中で、今後の可能性や課題と言えるものにもいくつか気づくことができた。最後にそれを記し、今後へ繋げていければと思う。

まず、今後南山アーカイブズの教育利用の可能性を更に広げていくために、南山アーカイブズの存在と有用性をより多くの人に知ってもらうような取り組みが増えていくとよいと感じている。ここまで記してきたように、南山アーカイブズは、南山学園に関する史資料を擁しているだけでなく、それらのより豊かな活用や理解を推進し、ひと・こと・ものを繋いでくださる存在なのである。しかし、少なくとも筆者は、この活動に取り組みまで、南山アーカイブズがこのような有益な存在であることに全く気づいていなかった。もちろんこれは、筆者の無知によるところも間違いなくあると思うのだが、南山学園に所属する人の一定程度は、筆者と同様の状態である可能性も高いのではないだろうか。これにもまして、南山学園の単位校に所属する学生達（特に、いろいろなから離れた学舎で学ぶ大学生達）の中に、どのくらい南山アーカイブズの存在を認識している人がいるのだろうか、もどかしさを感じている。実際、今回の教育コンテンツ活動に参加した学生達が、この活動に関わるまではライネルス館のことも南山アーカイブズの存在も知らない状態であったことを踏まえれば、認知度の高くない状態である可能性は否めないだろう。

加えて、学生達と話す中で、例え南山アーカイブズの存在を知ったとしても、

「南山学園の『歴史』に関する施設であると言われた時点で関心を持ってないかもしれない。」

という声を聞いた。学生達にとって『歴史』と聞けば、すぐさま中学・高校時代の歴史の授業がイメージされるようであり、ひたすら暗記に苦しんだネガティブな記憶が蘇る様子であった。そのため、より多くの人に南山アーカイブズに対して関心を持つってもらうためには、本施設の説明をする段階で、学生達が一般的に持つネガティブな連想に繋がってしまわないようアピールしていくことも大事なのではないかと感じた。例えば今回見学させていただいた防空壕跡や、通常よりも高い位置に設置された黒板に実際に触れてみる体験は、間違いなく学生達の興味・関心を掻き立て、アプローチしようとする行動へつながっていた。このようなエリ

アを見学できるようにすることは、現時点で容易ではないかもしれないが、体験を通したひと・もの・ことへの理解が可能である側面をアピールしていくことによって、この施設そのものに関心を持つ人が増えるのではないかと考える。

また、南山学園の単位校には小学校から大学院まであることに目を向ければ、当然、歴史全般やこの地域に関心を持っている児童・生徒・学生も数多く存在していると推察される。その方々にこの素晴らしい施設の存在を知ってもらうためには、南山大学附属小学校で実施されているように、各単位校の授業の中でこの施設を訪れる機会を創っていくことも大切な取り組みではないだろうか。筆者が日々関わっている大学生に思いを巡らすと、元々この地域や南山学園に興味・関心を持っている学生であれば、授業で半強制的にこの地を訪れることで、その後も自ら南山アーカイブズやいろいろな街を訪れ、より深く知り、学ぼうとする可能性は十分にあると思われる。その体験の中で、何らか興味を惹かれるものに出会い、それをレポートや卒業論文のテーマとして探究したいと考えた場合には、今回の筆者ら同様に、関係者の方々のサポートを受けながら学びを深めていくことができるに違いない。このことは、学校の中にいるだけではなかなか体験できない、南山学園関係者や地域住民の方々と連携し、人と人との関わりを通して学ぶ貴重な機会につながっていくものと考えられる。

次に、南山アーカイブズの利用そのものとは少し逸れてしまうのだが、教育コンテンツを視聴した人たちから感想を得たり、コンテンツの視聴が実際に歴史的建造物を訪れることにつながっているのかについて調査するなど、このコンテンツが利用者へ与えている影響について検討していくことは、今後の課題だと考えている。今回の筆者らの取り組みは、有志の大学生が、主に小学生を対象に、南山学園に所属する教職員や地域の人々と連携し、地域に存在する歴史的建造物などについて知ってもらうことを目指した実践活動だったと言えるだろう。ただ、現時点で情報の発信にまではたどり着いているものの、このコンテンツの利用状況など、その後の影響について捉えることはできていない。SNSの利用に長けた世代の学生達にとっては、視聴者からのプラスの反応が数やメッセージで見えることによって、活動のモチベーションは大きく変化するものと推察される。そのため、自分たちの制作物から何がどのように伝わっているのか不明なまま取り組んでいる状態は、活動の質を高める上でも、継続の面でも、決して

よい状況とは言えないであろう。

実際のところ、コロナ禍で加速するかと思われた教育現場におけるデジタル機器の活用は、少なくとも公立の小中学校において、それほど進んだとは言えないのが現状のようである。そのため、当初ターゲットとして想定していた人達に対して、教育コンテンツの活用を大きく推進することとは容易ではないかもしれない。しかしながら、まずは地域の学校に対してより積極的な情報提供を行っていくこと、また、コロナ禍前からデジタル機器の教育利用を積極的に行っている南山大学附属小学校と連携していくことで、コンテンツの活用を推進し、今後もよりよいものを提供し続けるためのフィードバックを得ることができるかもしれない。

また、一教員として教育現場の側に立つて考えてみると、このコンテンツは、学習を補完する素材としての可能性を持っているようにも感じる。学校外で行う体験学習は、通常の授業以上に限られた時間の中で実施する必要があるものである。そのため、例えば事前にこの教育コンテンツを視聴してみるとにより、子ども達は、現地でより深い内容や異なる視点からの問いかけをする可能性が生まれるものと考ええる。また、事後の視聴になったとしても、授業の中では訪れることのできなかった地域のひと・もの・ことに触れ、それらに対する興味関心が生まれていく可能性もあるだろう。その思いを活かし、ご家族などと共に訪れ、自らの地域の営みについての理解を広げ深めていくような、主体的な学習を促す素材としても活用できるように感じている。

このように、教育コンテンツを利用してくださる可能性のある方々との連携が実現していけば、コンテンツの内容の充実と利用の促進につながり、そこから南山アーカイブズの利用の可能性も今以上に広がっていくものと考える。

こうして活動をふりかえってみると、作成した教育コンテンツの量や質という点では全くもって拙い、十分とは言えない状況ではあるものの、その過程で得られた体験と学びは、筆者らにとっても大きなものであったと言える。ひと・もの・こととの関わりを通して学びが生まれる南山アーカイブズと、ここまでご協力いただいたお一人おひとりに感謝しながら、ここまでの体験を無にすることなく、これからも、関わる人それぞれの学びが少しでも広がり、深まるような活動を続けていきたい。

参考文献・参考URL

いりなか商店街発展会（二〇二二） いりなか探検！発見！おみせたんけん！ 最終閲覧日二〇二四年八月二九日 <https://irinaka.jp/edu/?fbclid=IwAR2bP38CvNn72u4qQKE11gts8JdDM0W4f1r4W576P8zK6313OmOJqLJfMco>

いりなか商店街発展会（二〇二二） いりなか探検！発見！ちいきたんけん！ 最終閲覧日二〇二四年八月二九日 <https://irinaka.jp/edu/?fbclid=IwAR2bP38CvNn72u4qQKE11gts8JdDM0W4f1r4W576P8zK6313OmOJqLJfMco>

永井英治（二〇一五） 南山大学と戦争遺跡 アルケイアー記録・情報・歴史―第九号 pp.65-94 南山アーカイブズ

永井英治（二〇二一） 続・南山学園の戦争遺跡 南山アーカイブズニュース 第十四号 p.14 南山アーカイブズ

南山大学五十年史作成小委員会編（一九九九） 南山大学五十年史写真集 南山大学

謝辞：

本稿に記したいりなか教育コンテンツの作成過程では、いりなか商店街発展会と南山学園の関係者の方々に大変お世話になりました。とりわけ、いりなか商店街発展会HP担当（みどり楽器店長）・近藤英生氏、いりなか商店街発展会会長（坂井歯科医院院長）・坂井謙介氏、南山学園経営本部総合企画室・富田沙織氏、南山大学国際教養学部教授・永井英治先生、南山大学附属小学校教諭・水越建太先生、南山アーカイブズ職員・村上麻里氏（氏名五十音順）には貴重なご示唆の数々と継続的なサポートをいただきました。みなさまのご支援に心より感謝申し上げます。

